

女優・宮地真緒

ゲストインタビューに聞く

カンパニータンのインタビューとして活躍されている各界の著名人たち。本業における信念やその軌跡、そしてインタビューを通じて感じることに、本誌編集局が逆インタビュー。



兵庫県・淡路島で生まれ育ち、15歳で芸能界に入った女優・宮地真緒さん。17歳で務めたNHK連続テレビ小説「まんてん」の主演をはじめ、映画やドラマ、舞台で幅広く活躍を続けている。また、大のマンガ・アニメ好きである他、2014年には防災士の資格を取得するなど、多分野へ高い関心を抱く。そんな宮地さんの女優としての哲学を伺うとともに、「COMPANYTANK」のインタビューとしての心構えに迫る。

インタビュー・文・編集：カンパニータン編集部

「演じることが好きだと分かったから、  
今でも女優を続けているのだと思います」

朝ドラヒロインとして女優デビュー

——まず、宮地さんはどのような子ども時代を過ごしてこられたのかを教えてください。

幼い頃から、常にテレビを見ているようなテレビっ子でした。ドラマも歌番組もバラエティも、もちろんアニメも。今は子ども向けのアニメと大人向けのアニメが二極化してしまっていますが、当時は家族みんなで楽しめるアニメが盛んな時期でした。物心付いたときには「ドラえもん」や「ドラゴンボール」がありましたし、小学生の頃に「セーラームーン」や「ちびまる子ちゃん」の放送がスタートして。アニメを見て曜日感覚を掴むほど夢中になっていましたね。そういう時代を過ごしていなかったら、今もこんなにアニメ好きにはなっていなかったかもしれません。

——それでは、芸能界に入ったきっかけというのは？

漠然と芸能界に対する憧れは抱いていましたが、夢物語だと思って誰にも相談していませんでした。高校1年生のときにたまたま目にしたオーディションも、周りに内緒で応募したんです。でも、地区予選まで通過してしまって。最終選考までは通らなかったのですが、そ

れがきっかけで現在の芸能事務所にスカウトして頂き、芸能界デビューすることができました。それからグラビアやエキストラの仕事始めて、その一環としてNHK連続テレビ小説「まんてん」のオーディションを受けました。すると思いがけず主演に抜擢されて、演技の経験もほとんどないまま「朝ドラヒロイン」になることに。

——初めての本格的な演技、しかも長期のドラマでの主演に挑戦してみて、いかがでしたか？

周りは熟練の役者さんばかりですから、迷惑をかけてはいけないというプレッシャーが大きかったですね。セリフを飛ばさないように、NGを出さないようにと思って毎日必死で、素の自分に戻る余裕もありませんでした。役に入ったまま1年弱を過ごしたのですが、朝ドラが終わるとともに、台本があって「次」が常に見えていた生活も終わってしまい——台本なしにどうやって生活するのか分からなくなったんです。私は昔から「ああいう人だったらいいな、こういう人だったらいいな」と想像しながら生きてきたというのあって、役に没入しやすいタイプだったんでしょうね。でもその1ヶ月後にまたドラマに出演させてもらうと、改めて「演じることが好きだ」と実感したんです。

舞台を機に演技を客観視

——朝ドラでは苦勞されたものの、その経験は大きかったですね。

そうですね。朝ドラをやっていなかったら今は女優をやっていないでしょうし。今思うととても大変な仕事ですけど、当時はそう思う暇はなく、ただただ必死でした。また、それ以上にミュージカル「ピーターパン」に出演しているときのほうが大変でしたね。歌もダンスもやったことはありませんでしたし、生なので失敗は許されません。「舞台には魔物が棲んでいる」なんて言いますが、ただならない緊張感が漂う現場です。それに、私は周りから飄々としているように見えるみたいで、自分は一生懸命やっているのに「もっと必死にならないと」と言われることもあって。そうした客観的な見え方と自分の気持ちとのギャップを感じたのがつらかったですね。

——映像作品とはまた違った難しさがあったのだと思います。その苦境をどうやって乗り越えられたのでしょうか。

なんとか稽古する中で、自分の演技を俯瞰で見られるようになりました。例えば、映像作品では自分の感覚で動いて立ち位置が多少ずれてしまってもカメラさんが追ってくれますが、舞台では立ち位

置を守らなければ照明は当たらずお客さんから顔が見えませんが、客席に背を向けて話すと声はお客さんに聞こえませんが、そうした舞台上での物理的立ち位置はもちろん、自分の演じる役は作品の中でどんな立ち位置にあるのかという見え方——今まではあまり意識してこなかった部分を、お客さんの目線に立って考えられるようになったんです。私は実力のないままドラマに出て、名前だけが一人歩きしている感覚がありましたが、この舞台を経験し、演技の基礎を身に付けたという自信を得ることができました。

### 演じる役の一番のファンになる

——役者さんによって役をどこまで作り込むかは異なると思いますが、宮地さんはどんなタイプですか？

ガチガチに役をつくるのではなくて8割程度完成させた状態で現場に臨むようにしています。その2割程度の余白を残すことで、相手とやり取りする中で湧き上がった感情や、「試しにこういうことをしようか」といった監督の指示を役に反映させることができるんです。

そして今は、映像作品の場合でも舞台作品の場合でも、役の状態に入りっぱなしにはしないようにしています。こまめにスイッチを切り替えて、空気を入れ替えるようなイメージですね。そうすることで、演じている自分を少し客観的に見つめて、立ち位置が確認できると思っています。ですから、例えば舞台では、一度袖にはけたら素の自分に戻って、再度舞台上に上がる3秒前くらいにスイッチを入れています。難しいシーンの場合はその少し前に自分のタイミングでスイッチを入れて、エンジンを温めているんです。

——すると、その役に入るために、どのように役づくりをしているのでしょうか。

私の中で決まった役づくりの方法というのはありませんが、今まで読んできたマンガや小説、見てきたアニメの登場人物を自分の頭の中にストックしてきた「キャラクター図鑑」からぴったりの役を探るようにしています。もちろん原作がある作品の場合はそれを読み込んでイメージしますが、オリジナル作品の場合は「このマンガのこのキャラクターみたいな人かな」と想像してイメージを作りあげるといった感じです。その際、どんな役も、みんな色んな理由があって色んな生き方をしているのですから、きちんとその役を好きになった上で作り込む

## 『その役難しいからできません』とは絶対に言いたくないんです』

ようにしています。そうして、好きになった役を演じることで、理解をさらに深められますから。言わば、友達をつくるような感覚で役づくりをしているんです。

——マンガ・アニメ好きの宮地さんだからこそその役づくりの仕方ですね。ちなみにマンガはどのくらいお持ちですか？

数えたことがないので具体的には分かりませんが、自宅の物置部屋がマンガで埋め尽くされていて…3ヶ月に1回は整理するようにしているんですけど、処分すると空いたスペースに新しいマンガを入れてしまって(笑)。アニメは新しい作品の放送が開始すると全てチェックしていて、1日に2、3本は見ています。家に帰るとテレビを付けてアニメを流し

ているという感じです。

——「キャラクター図鑑」のストックもどんどん充実しますね。昨今、マンガ・アニメの原作が多く実写化されていますが、それについてはいかがですか？

役者が作品を読み込んでいなくて、キャラクターへの愛が足りないと、お客さんはそれを感じ取って冷めてしまいます。その一方で、作品やキャラが本当に好きだと伝わってくる演技は、それほどうまくなくても受け入れられるもの。それを原作ファンとしても実感していますから、私が原作のある作品を演じるときは、「私がこのキャラの一番のファン」と言えるほど好きになることを心がけています。私よりもそのキャラが好きの人がいるのであれば、その人が演じたほうが良いでしょうし、原作にも見ている人にも失礼になりますから。

### インタビューとしての思い

——宮地さんは中小企業の経営者の方と対談するインタビューとしても活躍中です。お話をする際にどんなことを意識されているのでしょうか。

普段生活する上で直接関わることのないようなお仕事も多いですから、疑問に思ったことを素直に聞くようにしています。「素人質問ですみません」と思ながらも、やはりそうしないと読んでいる方もどんなお仕事なのかイメージしづらいでしょうから。

——女優業とはまた違ったお仕事ではありますが、応用できる部分というのはありますか？

そうですね、インタビューを始める前は、経営者は堅い人ばかりだと思っていましたが、実際にお話を伺うと本当に様々な方がいらして、その考え方や話し方、意志の強さは役づくりの参考になります。私は高校から芸能のお仕事を始めたので、一般企業で働いたことはありませんが、対談を通じて社会を少し覗いているのではないのでしょうか。例えばOL役を「会社はこういうもの」と思って演じるのは完全な想像ではありますが、それを熱が届く範囲で触れられるのがインタビューのお仕事の魅力の1つだと思っています。

——これまでたくさんの対談をさせていただきましたが、中でも印象的な経営者の方はいらっしゃいますか？

防災士の委員会を運営されている経営者の方ですね。私は子どもの頃に阪神・淡路大震災を経験していて、防災に対する意識は持っていたはずなのですが、東日本大震災が発生したときに何も行動を起こせなくて。「もっと、何かできたはず」。そう思っていたときに対談で防災士の仕事を知り、この先災害が起こってしまった場合に何かお役に立ちたいと思って、私も防災士の資格を取得しました。今は震災のあった日にブログを通じて防災意識を高めることしかできませんが、これから資格を生かせるお仕事があればもちろんやりたいと思います。

——では、弊誌にご登場される経営者の方々に向けてメッセージをお願いいたします。

女優業もそうですが、経営というのは社長さんがいないと成り立たない、代わりのきかないお仕事です。特に起業されたばかりの方は、「今頑張らなけれ

ば」と頑張りが過ぎてしまうかもしれませんが、しかし、体調を崩してしまうと先の目標もかなえられなくなってしまいますから、何よりもまず健康を第一にして頂きたいと思います。

### “普通女優”として演技を続けたい

——役柄としては「頼れるキャラ」を演じられることが多いように思いますが、実際の宮地さんはどうですか？

しっかりしているように見られがちなんですけど、実はそうでもなくて、普通以上に普通なんだと思っています。金銭感覚や時間感覚は芸能界の方よりも一般の方に近いでしょうし、学生の頃から、勉強も体育も音楽も、ずば抜けてできることもないけど、全くできないこともなく、本当に「普通」なんです。そして、お芝居の世界というのは、特殊な舞台設定の場合もありますが、多くの場合は普通の人たちの普通の生活を切り取ったもの。だから私もできるだけ普通な人間でありたいです。インタビューのお仕事は、その「普通」の感覚を一般のものに近づけられる時間でもあると思っています。

——なるほど。その普通さを持ち合わせているからこそ、「キャラクター図鑑」の中の様々な役を演じられるんですね。

少し足を伸ばせばどんな役にもなれる、偏りのない立ち位置にいるのだと思います。今まで「難しくくてできない」と思って断った役はありませんし、これからはどんな役であっても演じることができる女優でありたいですね。そんな“普通女優”として、「宮地真緒って、普通の人の役をやらせたらうまいよね」と言われたらいいなと思います。

——女優として活動を続けられて15年以上が経ちましたが、これからはどんな活動をされていくのでしょうか。

40歳になっても女優を続けていることが現在の目標です。今は確固たる軸が持っていない気がするのですが、その頃までにはしっかりと軸を持とうと思います。そして、若手の役者さんばかりの作品でも「宮地真緒が出ているなら心配ない」というような安心感を与えられる女優になればいいですね。

あと、最近は怒られたいと思っています。長く演技を続けてきて、怒られることが少なくなりましたが、怒られると「なにくそ!」という負けん気が出てきますから。そうして熱を持ち続け、お芝居だったら脇役にも主演にも挑戦しながら、もっと演技がうまくなれるよう、努力していきたいです。

(取材：2017年3月)



宮地 真緒

みやじ・まお／兵庫県淡路島出身。2002年、NHK連続テレビ小説「まんてん」でヒロインに抜擢され、宇宙飛行士を目指す主人公を演じて脚光を浴びる。以降、ドラマ・映画・舞台・バラエティ・グラビア等で活躍している。また、山口百恵の「秋桜」をカバーし、歌手デビューも果たす。震災の経験を生かそうと地域防災の普及を図る「防災士」の資格も取得。また自称「マンガ・アニメおたく」という意外な一面も持っている。

■公式ブログ  
<http://ameblo.jp/miyajimao/>